

游 清 第 三 記 (上)

内 藤 湖 南 記

内 藤 戊 申 編

ま え が き

さきに發表した己亥鴻爪記畧(明治三二年)及び清國再游記要・游清記(明治三五年)に引き續いて明治三八年の渡清日記を出すことにした。前者は著者の萬朝報記者時代、後者はこの第三記は大阪朝日在社中である。このあと著者は三十九年大朝退社後(奉天)と四一年(間島・吉林)、四三年(北京)、四五年(奉天)と渡清し、四五年には羽田亨氏とともに奉天宮殿の滿文老檔と五體清文鑑を全卷寫眞するという事業を完成した。そして奉天宮殿内をはじめて學術調査しこれらの史料を發見したのは實にこの第三游においてであつた。近時東京の神田信夫氏等によつて滿文老檔の翻譯刊行が行われているがこの日記はいわはその緣起の第一卷に當る。三九年、四五年の日記も残っているので追て發表するつもりである。

緣起といへば繪卷であるが、さいわい著者の編にかかる滿洲寫眞帖という恰好の繪解きがある。初版(明治四一年)でも増訂版昭和十年(鶴淵一編)でもそのままこの第三游記の挿繪になる。お持ちの方は是非そばに置いて頂きたい。因みにこの寫眞の撮影に當られた大里武八郎氏は今日なお郷里秋田縣に存命しておられるがその昔の

御苦勞に對してこの機會に改めて感謝の意を表したい。

奉天の諸寺の藏經や宮殿の書籍その他に關する著者の文は目録書譚と讀史叢錄に殆んど収められている。ただ奉天訪書談(大正元年中央公論)だけが漏れている。これには宮殿の殿閣配置圖も入つていて讀物としては最も面白くかつ詳しい。地圖も是非參看して頂きたいが普通の地圖ではあまり役にたたない。編者が最もよく利用したのは奉天市街には大正元年の南滿洲鐵道案内の附圖であり、永陵旅行には滿洲歷史地理の附圖中の黒圖阿拉圖が普通見られるものの中では一番役に立つた。

註はやや冗漫に過ぎた感がないでもない。著者と一緒に旅行でもしているような氣分で調べていった編者にはこれでも大分削つたつもりなのだが、參考資料は游清記のばあいよりも多く揃えたつもりだが旅行の舞台が歴史の中央からかたよつていたためか分らない人名が多かつた。御存じの方は教えて頂きたいと思う。本文中(一)内の文はもとの手記では多く欄外の書き入れであるが、編者の獨斷で適當な所へはめこんだ。(一)はすべて編者の補入である。註について義兄(鶴淵一)、家兄(乾吉)のほか三田村泰助氏にも教示をうけた。ここで感謝しておきたい。また本文原稿寫鈔の勞を煩わした加茂町

の兎本恵有君にもお禮申上げる。

(一九五七・五・一八 男戊申記)

明治三十八年三月三十一日 東上し翌

四月一日 上野圖書館の圖書展覽會を觀る。時に奉天大戦方に我軍の克捷に歸し陸戦の大勢已に定る。余乃ち奉天文溯閣の四庫全書及び黃寺の藏經宜しく我邦學者の注意すべき所たるを論じ、之を新聞紙に上せて東京大學の有力者及び知る所の人々に贈る。事前月末に在り。

四日 文科大學史料編纂係に黑板虛心(勝美)を訪ふ時、人あり、市村瓚次郎氏余を訪はんとするの意を傳ふ。蓋し文溯閣圖書の事に關するなり。後

七日 市村氏を其家に訪ふ。氏は語るに内命あり、(市村氏云く工科大學先づ建築學の調査の爲奉天に出張を望む。因て文部省より文科は如何と反問せられ遂に此事の端を啓けりと)文溯閣圖書調査の爲に奉天に赴かんとするを語り且つ余も亦往くべきや否やを問ふ。余因て試みに之を大本營に謀るべき事を語りて別る。

後數日大本營副官堀内中佐を訪ひ之を謀る。中佐は若し文部省の名義あらんには旅行の便宜は之を與ふること易かるべきを語る。又此事を以て德富蘇峯君に謀る。蘇峯云く文部省頼むに足らず、余當に爲に山縣侯に説くべしと。余其の厚意を謝し一面之を坪井(九馬三、上田(万年)等の文科大學教授に謀る。時に山川(健次郎)大學總長千葉縣に赴き在らず。(山川總長を訪ひ在らざりしは十二三日の交なり。乃ち直ちに坪井氏を訪ふ。坪井氏は文部大臣將に關西を巡遊せん

とするを以て其の決定は來月中旬以後に在るべきを語れり)而かし〔て〕二氏皆之を賛す。因て再び堀内中佐を訪ひ文部省の囑託は成るの望あるを告ぐ。

〔廿三日〕 既にして山川氏千葉より歸る。乃ち之を訪ひ、語るに素志を以てす。山川氏云く、此事の決定は必ずしも文部大臣の歸るを待たず。但だ陸軍省は派遣員の多きを欲せず。現に大學よりは塚本(端?)工學博士と市村氏とを派遣するの豫定なり。故に人員の制限にして差支なくば足下に囑託することは少しも厭はずと。因て明日文部次官と會見の約あり、其の消息にして知るを得ば之を告ぐべきを語る。時に廿三日なり。

〔廿四日〕 翌日文部省に澤柳政太郎氏(後の京大總長)を訪ひ、次官總長會見の消息を問ふ。澤柳氏爲に文部次官を訪問せしに時に未だ會見せざりしとの事なりき。余是に於て文部省の甚だ頼み少きことを感じたり。余の奉天行を思ひ立つや圖書調査の一事を以て満足せず、盛京政務の現況をも調査するの志あり。前に已に民政調査の必要を新(聞)紙上に論ぜしことあり。外務省を説きて費用の補助を得んとす。之を黑板虛心、片野重久等に語るに二期せずして其意見一致せり。以爲らく田中隆三氏を介して奥田義人氏より説かしむべしと。余も亦田中氏を介するの便を思ひ、廿一日之を農商務省に訪ひ志望の存する所を語る。田中氏約するに山座政務局長に説く事を以てす。翌日〔廿三日〕山座氏を訪ふ。在らず。後田中氏を訪ふ。氏云く必らず山座氏を訪へ、余頗る鼓吹に勉めたりと。

廿五日 に至り午前之を高等捕獲審檢所に訪ふ。氏出で、面し午後外務省に來らんことを求む。因て約の如く往く。氏之を賛し速に外務大臣に謀るの意を語る。辭頗る謹嚴なり。此夜山川總長を訪ふ。

總長云く、大學の支出すべき費途なきに苦しむ故に二人の派遣亦未だ遂かに決する能はず。其の成否は異日之を報すべしと。即夜大阪に歸る。

同社(大阪朝日)諸友紛々、余が滯京の太だ永きを以て村山(龍平)、上野(龍二)二氏に訴へしものゝ如し。(余歸る時一人語頗る余を犯せり。余共に校せず)一日余上野氏に告ぐるに在京中の事を以てす。氏頗る之を諒とせり。

〔三十日〕 既にして山座氏の書到る。大臣も亦必行を望み費用を支出せんとするを報す。時に三十日なり。

五月一日 因て村山、上野二氏に滯京の所因と以上の事實とを語る。二氏異言なし。村山氏は之を編輯各係長に諮るの必要あるを言ふ。余曰く可なり。但だ事已に此に至る、中止すべからざるなりと。村山氏然らば其意にて諮るべしと云へり。然るに翌日會議の結果反對多きことを語り躊躇の色あり。余意甚だ平かならず。固より此事あらんことを知りたれば直ちに係長(余時に論説、通信二係を兼ね)を解かんことを申出で、且つ後任者にして余が歸社せし時再び余に其任を還さざるべからざるは快しとせざる所なるべければ、余は全然辭任すべき意を道ふ。村山氏然らば後任を奈何すべきと頗る之を難するものゝ如し。余云ふ。通信は石橋(白華)可なり、論説は西村(吳因)にても可ならんと。村山、上野二氏は再び此事情を以て各係長に諮らんことを約す。翌

三日 事始めて諧ふ。然るに村山氏云ふ、諸係長の意見は通信係の獨立は頗る理に合せず、之を東電係に合する方可なりとの説もありしも結局そのまゝとし、西村氏係長たるべし。論説係の長あるは更に不合理なり。因て缺員のまゝとし原稿の取舍は整理係にて之に

任すべきことに決せりと。余之と短長を校するの無用を知り乃ち之を諮せり。是れ三日の事なり。

渡航費に關しては一日の談話中、余四百圓前後にて足るべきことを申出で、上野氏は其過少につき危ふみしも村山氏はそれにて可ならんと云へり。

三四月間上京の費に就きては、余在京中其事の成否未だ明らかならざるを以て私費とするも可なりとの意を辰井梅吉氏まで漏したり。今其事成れるも二人は未だ明らかに社費、私費の別を決せず。

廿六日 再び上京す。前數日村山氏より上京費用及び渡航費中より二百圓を借る。

〔廿九日〕 廿七・八日兩日、土日曜に當れるを以て山座氏を訪はす、廿九日之を訪ふ。是より先き、大阪より氏に簡して費用は一千五百圓乃至二千圓を要すべきを道ふ。氏はに於て費用其他の事未だ大臣に謀らざるも、大概希望通りにて可なるべしと云ふ。余先づ其最低額を受け後不足せば再び請ふべきことを語る。

三十一日 再び訪ふ。山座氏事都て豫定の如く決せることを告げ、陸軍交渉の事は來月五日を期し、金圓交付のことは三日を期す。

〔六月〕三日 期定の時間におくれたるを以て山座氏に面せず。此間簡して隨行員一人を伴ふことを謀る。

五日 山座氏に面し陸軍の渡航及び便乗許可證を得。氏隨行員同伴のことを賛し、再び陸軍省に交渉するを准す。此日西村會計課長より金一千五百圓を受領す。數日の後隨行員を同郡の法學士大里武八郎氏と定む。因て陸軍の許可證を改む。

十二日 事全く畢る。前二日市村氏を訪ひ事の經過を告げ其の行期を問ふ。翌日市村氏の書至る。山川總長に謀るに費用のこと未決

なるを以て行期末定らざるを答ふ。

此週間に於て東亞同文會に託し、盛京通鑑¹³の謄本を作り、更に盛京典制備考¹⁴を借り質鈔することゝせり。又、狩野亨吉氏(當時一高松長)の「清查東大庫底檔」¹⁵を借鈔す。

十三日 和田萬吉氏(當時東大助教)に面して宮内省所藏西藏藏經を閲し其の目錄の借鈔を託す。大里氏に諸事を託して此夜京を發す。

五月 歸阪中德富氏より書あり、長岡外史 大本營參謀 次長と謀り、大本營囑託の名義を准さるべきことを告ぐ。五月上京の際堀内中佐韓國に赴きて在らず。其歸るに及て之を訪ひ、并せて外務省の交渉進行のことを語る。中佐意太だ満ち余が言を盡さず、直ちに囑託名義のことを謀る。既にして外務省の陸軍に對する交渉先づ成る。中佐の書あり、大本營の囑託たる必要を認めず、但だ旅行の便宜は盡力すべしとあり。因て之を訪ひしも在らず。遂に書を留め會面せずして歸阪す。

十四日 大雨、名古屋に抵り宿す。夜、上遠野、松田、田中、小山、中原、殿村諸氏と川文に飲む。

十五日 大雨、眞福寺の古書及び七つ寺の古經櫃を觀る。(別に記せり)此夜名古屋滿韓研究會の爲めに一場の講話を爲す。

十六日 關西鐵道より大阪に歸る。勢伊間峽中の景絶奇と稱すべし。

(十九日 京都に往き即夜歸る)

廿五日 大里氏來る。

廿六日 新聞社より金三百圓を受領す。此中百圓は第二回の上京費なり。村山、上野二人頗る之を憐む。余其の受ける費用の太だ少きを説示して遂に之を取り得たり。第一回の上京費も亦社費と決す。

〔出發〕

六月二十九日 午時、大里氏先づ發し神戸にて金六百圓を正金銀行に託し、大連まで爲替することゝす。余は夜九時五十分を以て發す。(日間、今井、關二氏來る。晚間、小池信美來り助く。夜、辰井來る)送り至る者、社外にて庄司、殿村、鹿田等、社内にて磯野、木崎、小池、辰井、太田、中尾、石橋、五良子、西郷、根本、久松等なりき。十一時神戸にて山陽線列車に乘換へ大里氏に會し、山陽道を下る。夜明けて玉島驛を見る。尾道、糸崎の間雨至る。風光極めて好し。河内、本郷間峽間の景亦奇甚し。

三十日 午前十時十九分廣島に着す。長沼旅館に宿す。(眞田幸憲氏來る)通信部の有田氏至る。發する前電約せし黑板虛心下關より來り會す。多く九州北部の金石文を携ふ。夜、新見、重田二氏黑板氏を訪ひ至る。(大里氏は字品に至り石川大尉を訪ひ乗船のことを謀る。六日までの船なしとのことにて大に失望す)

七月一日 雨甚し。黑板、大里二氏と宮島に遊ぶ。(是れ余が嚴島第二游なり。第一游は二十八年四月に在り)先づ黑板氏と縣廳に至り、白阪事務官に面し佐野宮司に紹介を請ふ。白阪諾す。十時五十分大里氏と已斐驛に會し宮島驛にて下車し汽船にて宮島に着し、紅葉瀾岩惣に午餐し繪葉書を買ひ多く知友に簡す。後二時半社務所に至り寶庫に就て平家繪卷等の寶物を觀る。別に記あり。五時汽船に乗り後れ、和船にて宮島驛に着し五時四十一分の汽車にて廣島に歸る。黑板氏は直ちに東上す。

二日 (晴)午前字品に至り石川砲兵大尉(漣兵)を訪ひ乗船のことを謀る。大里、有田二氏も同行す。四日發の須磨浦丸に搭することを決す。午後泉邸を觀る。大里氏及び同宿の林季四郎氏同行す。夜

尾形作吉氏來り談す。

三日（晴）夜石川大尉來る。遂に宿す。青木事務官定議を訪ふ。在らず。此人余童時秋田縣の學務官として地方を巡回し、余が作文を賞して之を遐邇新聞に載せしことあり。二十六年前の事なり。

四日（晴）朝青木事務官より電話あり。因て赴き訪ひ舊を談す。既にして青木氏來り訪ふ。午時宇品に赴く。有田氏特に來り送る。一時短艇に乘じ二時過ぎ須磨浦丸に乘る。石川大尉來り送る。四時船發す。夜霧あり、船停すること數時。

五日 午後二時船門司に入る。雨甚し。上陸せず。新聞を買ひ、露國黑海艦隊叛亂の事、我が大使任命の事を知る。大汽船ミノンタ號、晚海峽を東に向て通過す。此船全權大使一行を乗せて東航すべしと云ふ。（同船の上官、相原、八木兩三等主計正、水津主計、大江、田中兩軍醫、丸川輻重兵少尉、永野、大橋、新羅三通譯）

六日 晨門司を發す。六連島の南又霧霧に逢ふ。停まること一時間許りにして發す。此日曇天。

七日 午後二時頃濟州島の北を過ぐ。天晴る。

八日 曇り雨あり。午前海波太だ穩。午後天晴れ浪高し。

〔大連・旅順〕

九日（日曜）前十時過ぎ大連に着す。上陸せしは午後四時なり。大棧橋に横付せる船及び港内船甚だ多し。兵站司令部に抵り第一番宿舍に案内せらる。前田副官來り挨拶す。（宿舍待遇意外に好し）夜大阪商船會社出張所に金島氏を訪ひ、その新成の浴槽をすゝめらる。快甚し。

十日 午前島田一等軍醫（乾之介）來り訪ふ。大江軍醫より傳聞せりとなり。奇遇甚し。石塚民政長官を署内に訪ふ。未だ出です。官

邸を訪ふ。門者其旨を傳ふ。午後出署すべきによりその方へ來るべしと。慢又愚。（歸りに島田氏を訪ふ）午後又訪ふ。その地方官的

慢狀笑ふべし。問ふ所一も要領を得ず。草場金三郎氏（舊知の人）を出して面接せしむ。亦要領を得ず。但だ金州民政署に紹介する一事のみ要領を得たり。大里氏は正金銀行に抵り爲替通知書未だ至らずとて金を受領するを得ず。（午後大雨、前田副官又來り挨拶す）夜川村十二郎氏來る。金島氏余等を延て某亭に飲む。草場氏、川村景敏氏（大將景明の子、郵船會社出張員）大里氏と同じくす。女主人大阪より來る。仲居の女皆人三化七なり。

十一日（快晴）午前本願寺布教使内田容道師來る。前田副官を訪ひ、又山田司令官に面し好遇を謝す。旅券を請ふ。（大里氏正金銀行より金六百圓受取る）午後本願寺を訪ひ其北公園設立の大連俱樂部を觀、更に川村十二郎氏を兵站病院第二分院に訪ひ、大公園に熊虎を觀、市中に物を購ひ歸る。旅券を受く。晚金島氏來る。此の日記今日始めて筆を執る。

十二日 朝七時半汽車にて大連を發す。（金島氏見送らる）宿舍より停車場まで手荷物を運ぶ補助輪卒を見て惻隱の情を動かす。汽車南關嶺に停まること三十分、此時腹痛み便を催すこと甚し。大に困む。驛内の厠に上り僅に苦を免るゝを得たり。營城子の北方機關車水取場にて、清人の群童が車中の日本人に向てパン進上、銀貨進上等と唱へ物を乞ふを見る。長嶺子を過ぎ旅順に入る。途上の諸山壑濠の跡歴々たり。（驛にて下車の際、川上公使館書記官を見る）正金銀行出張所に小貴氏を訪ひ晝餐を饗せられ、後其の新造中の家に宿することし、食事は兵站司令部支部より旅順ホテルの食を供せらるゝこととなる。大里氏の友人篠田治作氏、笠井陸軍理事と來

る。川久保鐵三氏亦来る。夜岡幸七郎氏を公議會に訪ふ。

十三日 (朝川上書記官偶爾來り談す) 伊地知要塞司令官を訪ひ、途々篠田氏の宿舍にて有賀博士を見る。篠田氏の案内にて東鶏冠山及び北砲臺、二龍山、松樹山一帶の諸砲臺を観る。篠田氏久しく第三軍に従ひ當時の狀を悉す。故に説明甚だ詳らかなり。歸りて新市街民政支署に大和田少尉を訪ふ。亦大里氏の友人なり。又引返して岡氏の招に赴き支料那理の晚餐を饗せらる。

十四日 港務部に照會してホベダ號及びペレスウエートの二艦を観、又黄金山に上り砲臺及び山下の沈没船を観る。歸りて午餐し新市街に至り大和田少尉を訪ひ其の案内にて二〇三高地を観る。脂膏土を濕ぼし腥臭堪ふべからず。歸りて川久保、阿部野二氏の招に萬歳ホテルに赴く。晚に雨又至る。歸路川久保洋行に過ぎる。

十五日 正金銀行に宿舎せる後備五十聯隊の兵、黒澤寅二郎と語る。黒澤は東京に在りて大内謁々先生の家に宿せしものなりと。奇遇と云ふべし。午後、小貴、大里二氏と洗澡堂に浴し、更に水師營に赴き(しに)管區長郡島忠次郎氏旅順に赴き在らず。巡查に導かれて乃木ステッセル兩將會見の家屋を観て歸る。晚に小貴氏に日本食を饗せらる。

十六日 (日曜) 午前、大里、澤原(正金銀行員)二氏と水師營に赴き郡島氏に面し、調査の要領に就き問ふ所あり。後に問目を造りて贈ることゝす。(此時、乃木ステッセル會見家屋を寫眞す)歸りて問目を造りて小貴氏に託す。小貴氏召集に遭ふことあり。夜、大雨雷電あり。

十七日 (微雨後曇) 朝、有賀博士來り訪ひ清朝初期の事に就きて問ふ所ありき。博士歸りて直ちに出て、川久保氏を要して烟草、

扇子等を買ひ、歸寓すれば既に汽車發程の時間に迫る。因て晝食をサンドウィッチとし結束して發す。(大里氏は旅券を兵站支部より受く) 小貴、川久保、篠田三氏見送らる。后一時四十分發車、南關嶺に至れば北行の車なし。(鐵路雨の爲に壞ると云ふ) 已むを得ず又大連に至る。夜金島氏を訪ふ。在らず。

(大連より營口へ)

十八日 (正午華氏八二、攝氏二六・二八の誤か) 大里、朝來二たび停車場に就て發車時刻を問ひ、后四時三十分發車の事に決す。時到り兵站司令部に就て旅券を請ふ。係りの下士余を誤りて酒保商人と爲せるが如く、乗車已に定員に滿てるを以て之を拒まんとす。已にして旅券を見て遽かに語調をかへ、とにかく停車場に就て謀れと云ふ。時已に迫る。大里氏又馳せて停車場に至れば乗車券事なく交付せらる。それより急に輪卒を呼び行李を運ぶ。纔かに乗り後れざることを得たり。六時半、金州驛に着し苦力を叫び、行李を運びて金州民政支署に至る。鶴岡永太郎氏在り。相賀照郷(署長にして黒板虛心の友)氏も亦好遇せらる。最も喜ぶべきは其氣清凉にして日々浴を取ることを得るに在り。(金州に在りて八十度を過ぎし日なし)

十九日 此日、醫師近藤傳五郎氏、通譯三澤信一氏、南金學堂總教習岩間徳也氏(同縣人)に面す。風あり極めて涼し。

二十日 此朝、相賀氏管内巡視の爲普蘭店に赴く。山縣元帥昨日大連に着し、今朝奉天に向ふと云ふ。鶴岡氏車站に迎送す。余は大里氏とまづ東門外の南金學堂に岩間氏を訪ふ。學堂は農園の中に在り。兩つながら舊と露人の經營せし所なり。今生徒八十名あり。地方紳士金六千圓を贖して之を維持すと云ふ。午餐の饗を受け、更に金州管區廳に三澤信一氏を訪ひ金州の行政に關する質疑を爲す。夜

三澤、岩間、鶴岡氏等と快談す。片谷通譯來り、明日導きて城壁上の古砲を觀せしめんことを約す。

二十一日 鶴岡氏語るに、昨夜北門外某寺賊の襲ふ所となり金三千餘圓を奪はる。蓋し高梁漸やく長ず、賊出づるの好機なりと。片谷通譯を兵站部に訪ひ、導かれて城壁上の古砲五門を觀る。別に記あり。(此日始めて八十度以上) 午後、大里氏と同じく三澤氏に借る所の調査書を寫す。午後六時過ぎ驢に乘じて發す。鶴岡氏、岩間氏車站まで送らる。七時十分の列車に投ず。普蘭店を過ぐる頃日暮る。八時十二三分なり。

廿二日 熊岳城邊にて夜明く。日出は六時前十二三分なり。八時五十七分大石橋に達す。憲兵に營口發の列車を問ふ。憲兵誰何不遜なり、旅券を示せと云ふ。露人の如し。之を示せば始めて語調を改むること亦露人に似たり。十二時二十分發の列車にて營口に赴く。一時十分牛家屯に着す。(雨至る) 兵站司令部に旅券を預け、苦力に行李を持たしめて舢舨泊地に赴く。途に島野正三郎氏に逢ふ。已にして歩哨に呵止せらる。監視哨に陸軍次官の許可證を示して過ぐることを得たり。舢舨に搭じて遼河を下る。税關附近の岸に着し、直ちに領事官に赴く。瀨川領事官に在らず。既にして歸り館内に宿せんことを勸む。乃ち之に従ふ。(此日浴を取る) 島野氏來り談す。彼は旅順の攻撃に於て、去年八月の二〇三高地攻撃、白樺隊等に加はり壓傷つきて功を立て、又奉天攻撃に加はり近ごろ經理部に從ふこととなれりと云ふ。

廿三日 (日曜、霽、微曇) 午前、鈔關長黑澤禮吉氏を訪ふ。(同縣人) 談すること少時にして同じく領事館に歸る。瀨川領事、余及び黑澤、大里、庄司鐵道氏(陸軍大學教授)船津書記生と午餐を共に

す。午後市街を散歩して歸る。正金銀行の森氏等に面す。

廿四日 午後二時三十分、奉天將軍趙爾巽氏河北車站に着す。期に先ち余瀨川領事に伴はれ、税關の汽艇にて車站に赴く。黑澤鈔關長、與倉軍政委員同乘す。領事余を與倉中佐に介す。中佐、色得意滿志の態ありて人を眼中に置かざる者の如くなりき。車站已に着し、領事等と亦艇に同乘して歸る。井戸川少佐亦艇中に在り。余敢て紹介を求めずして止む。既にして趙將軍來りて領事館を訪ふ。瀨川領事余を將軍に介すること甚だ詳なり。佐藤大尉(安之助、肋骨と號す。俳句を能くす)將軍と同行し、余が名を聞きて自ら名のり且つ將軍に語るに余が有名なる人物なることを以てす。將軍余が朝日の記者なることを聞き、又余が問ふによりて我が牧、土屋二通信員を見しことを語る。甚だ歎曲なりき。既にして辭し歸る。此日艇中に在りて伊集院天津總領事明日營口に來るの報を得。瀨川領事此事を以て余に語り、因て余は大里氏と外宿の事に決す。浴を取る後、日營ホテルに移る。夜、瀨川領事、太田領事官補と來り話す。話中、井戸川少佐余が艇中に在りしを聞き、相識らざりしを惜めりと云ふ。夜、雨至る。

廿五日 午後、街上に在て宮井治一氏の名牌を見る。乃ち入て訪ふ。遂に談新聞通信及び賣捌の事に及ぶ。宮井氏通信員として藏内正太郎氏を薦む。乃ち將きに出てんとする滿洲日報の記者なり。因て偕に滿洲日報社を訪ひ、中島眞雄氏に面す。氏も亦藏内氏を薦む。話すること少時にして歸る。此夜、余領事晚餐の招に赴く。梨羽海軍中將、中川(重光)金剛艦長、某參謀、與倉陸軍中佐、井戸川少佐、伊集院天津總領事、黑澤鈔關長等を賓客とし、日本式晚餐を供せらる。領事の紹介を以て井戸川少佐に面す。明日軍政開始一周年の祝

典あるべし、領事余等に勧めて同じく會場に赴かしむ。

廿六日 午後、祝典會場に赴かんとし、先づ領事館に抵る。此日愛國婦人會奥村五百子女史其従者と同じく來りて領事館にありと聞き、事務室に入りて之を避く。既にして領事、伊集院總領事及び奥村氏等と館を出づ。余等乃(ち)之と偕に會場に赴く。途に領事余を奥村氏に介す。前天津領事鄭永昌氏も亦在り。會場には相撲、自轉車競走、藝妓手踊、支那唱戲等ありき。(此日並に前夜、與倉氏頗る欺曲なりき。蓋し井戸川少佐の余を重するに由りて感悟する所あるなり)偶然面會せる者平井半二郎、中小路龜次郎、池田龜治、野間五造、中村元太郎、西野通諸氏、新に識りしもの原田鐵、岡崎深丸、權太某諸氏。歸途軍政署宿舎内の庭園を觀て歸る。夜に入り池田龜治、上遠野栗、宮井、藏内、中村、中小路諸氏來訪す。吉原四郎氏亦來る。蓋し其の天津より新に來り、中島氏より余が此に在ることを聞知せるなりと。其前年別後蒙古に入り、歸りて青木大佐の託を受け海拉爾に入る。此後横川省三氏等と事を俱にするも幸に免れ、(行く者十二人、免る者五人と云ふ)歸るを得たることを語り、又今年一月、敵の營口を奇襲せる時の狀を説く。

廿七日 午前、中小路氏麥酒一ダースを贈らる。權太氏來り深水氏より託されたる書信を交せらる。藏内氏又來る。野間五造氏來り談す。正午、野間氏余等をマンチュリアン、ハウスに饗す。午後吉原氏來る。黑澤氏を訪はんとし之に途に逢ひ、晚間過訪を約す。中村元太郎氏を訪ふ。在らず。西野氏に面す。晚に黑澤(慶吉)氏を訪ひ晚餐の供を受く。池田龜治氏も亦來る。黑澤氏に就て鈔關の狀況を聞き得、且つ數種の調査書を贈らる。得る所少からず。

廿八日 與倉軍政官を訪ふ。在らず。又領事を訪ふ。亦在らず。

蓋し、此日山縣元帥北より南歸す。二人並に大石橋に至りて謁を執るなり。因て領事の書生某に託し辭別の意を致して歸り、黑澤氏に辭別す。氏鈔關の水夫に命じ余等を牛家屯に送らしむ。之に因りて頗る行李運搬の便宜を得たり。(前日、中小路氏贈る所の麥酒は吉原氏の請により滿洲日報社員に贈る)二時、小汽船にて海關碼頭を發す。(吉原氏も亦北行の事あり、同じく發す)藏内氏來り送る。牛家屯に達し、車を備ひ停車場に至り、大里氏は旅券並に乘車券を受領す。宮井氏來り送る。偶然藤田榮一氏に逢ふ。相見ざること六七年。其の現に大石橋に在りて鐵道事務に従ふことを語る。三時四十分發す。人多く且つ客車の聯結不定なるを以て貨車中に搭す。暑甚し。四時三十分大石橋に着す。藤田氏の欺遇を受く。驛にて瀨川領事、伊集院總領事、與倉軍政官等を見て辭別す。三人營口に向て去る。余等は錯りて六時三十分の列車に搭し得ず、七時三十分の列車に搭す。其の客車なきを以て貨車に搭す。余、大里、吉原、僅に三人、其の反て寛濶なるを喜び、ハンモックを吊り燭を點じて談じ且つ臥す。夜一時半遼陽に至り吉原氏下車す。

註 參考文獻略稱一覽

再游記 湖南「清國再游記要」

己亥記略 湖南「己亥鴻爪記略」

日記 湖南「明治三十九年秋冬日記」「明治四五年奉天日記」(未刊)

寫眞帖 湖南「增訂滿洲寫眞帖」

目曙 湖南「目曙書譚」

訪書談 湖南「奉天訪書談」(中央公論大正元年十月號)

回顧錄 對支回顧錄下(列傳)

續回顧錄 續對支回顧錄下(列傳)

先覺記傳 東亞先覺志士記傳下(列傳)

興信錄 第五版人事興信錄(大正七年)

縣人雜誌 秋田縣人雜誌

中國指南 七版增訂中國旅行指南(民國八年)

鮮滿支案内 鐵道院「朝鮮滿洲支那案内」(大正八年)小西榮三郎

「最新朝鮮滿洲支那案内」(昭和五年)

村山傳 村山龍平傳

①文潮閣の四庫全書 についての著者の文には「文潮閣の四庫全書」

(目録所収)がある。

②黃寺の藏經 奉天城外の喇嘛寺黃寺(本名實勝寺、一名皇寺)そ

の他の寺に蒙文または滿文の藏經があることを著者は明治三五年

(一九〇二)にすでに實見していた。それらの中に歐洲學者がつと

に注目していた、他に類のない滿文藏經を確實に探しあてるのが

この次の旅行の一つの重要目的だった。はじめ著者は黃寺にある

ものがそれだと誤認していたが(註③參看蒙文滿文を豫め勉強し

ておいた結果、この次の調査において黃寺のものは金字蒙文藏經

であり、滿文藏經はべつに北塔(奉天城北郊の法輪寺)にあったこ

とを發見したのだった。これらはいずれも東京大學に齎らされた

が大正十二年(一九二三)の震災で焼失した。この間の事情は湖南

「焼失せる蒙滿文藏經」(讀史叢錄所収)に詳しい。

③「東洋學術の寶庫」(明治三八・三・三〇大朝)の一文を指す。文

中「又皇寺といえる勅建の喇嘛大寺ありて西藏、蒙古、滿洲三文

の佛經を藏せること吾輩の親しく檢視せる所に係れり」の句あり。

④市村瓚次郎 一八六四〜一九四七 茨木縣人。明治三一年八月東

大助教、三八年七月教授、支那哲史文學第二講座分擔。滿洲史研究には「清朝國號考」(東洋協會學術報告一、一九〇九年)の一篇がある。

⑤堀内文次郎 一八六一〜? 長野縣人。この年著者が奉天に着く

(七月二九日)數日前山縣有朋元帥の前線視察に隨つて奉天に赴い

たが(山縣傳下六八五、本稿七月二十日)入れ違いになつて著者と

は會わなかつたらしい。「參戰二十將星日露大戰を語る」(昭和十

年刊)にその回顧談が少し載つてゐる。

⑥田中隆三 秋田市の人。明治二二年東大法科卒、農商務參事官だ

つたが、のち辨護士になり民政黨の代議士として當選五回。昭和

四年文部大臣(縣人雜誌一)

⑦山座圓次郎 一八六六〜一九一四 福岡の人。明治二五年帝大法

科卒、外務省に入り釜山・上海・仁川領事館・京城公使館などに

歷任の後三四年本省政務局勤務となる。日露戰役には小村外相の

片腕として活躍した。大正二年六月より駐支公使となり三年五月

任地に急逝した(回顧錄・先覺記傳)

⑧村山龍平・上野理一 大朝經營者。朝日新聞社は昭和二八年「村

山龍平傳」を刊行したが、これは同時に朝日社史でもあり、上野

理一傳でもある。朝日關係の人物は編者は殆んどこの傳によつて

調べた。

⑨石橋爲之助・西村時彦 ともに當時大朝の人材。とくに西村天因

は文筆家としても名高く「日本宋學史」(明治四二)、「學界の偉人」

(明治四四)等の著があり、湖南とともに明治三十年代の朝日の花

形記者だった。

⑩辰井梅吉 明治二六年客員となつて朝日を大ならしめた高橋自持

(健三)の書生より二八年朝日に入り、在社四八年事務取締役にま
 であつた(村山傳二九〇)

⑪大里武八郎 秋田縣鹿角郡花輪町の人。號桓堂。この次の旅行の
 ほか、明治三九年の朝鮮南滿旅行には稻葉君山氏とともに、四一
 年の朝鮮・間島・吉林旅行にも著者に隨行して寫眞撮影に従事し
 た。「滿洲寫眞帖」の貴重な寫眞は殆んど大里氏の手に成る。四二
 年より著者の紹介により台灣舊慣調査に従事、四五年台灣總督府
 法院判官となる(寫眞帖跋) 今年(一九五七)著者の郷里毛馬内に
 建つことになつてゐる湖南頌德碑の書の揮毫を快諾した。

⑫東亞同文會 日清戰後近衛篤磨らが組織した同文會と、同種の東
 亞會とが合併して明治三十一年十一月近衛公を會長として發足した。
 雜誌「東亞時論」を出して支那保全を主張し、日露開戰を唱えた。
 因みに多くの近代日中交渉史料を含む東亞同文會の藏書霞山會館
 文庫は現在編者の勤務先の愛知大學にあり編者はこれが整理に當
 つてゐる。

⑬盛京通鑑八卷 のちに滿蒙叢書三に收められたがこの巻に限つて
 解題がない。内容は史書ではなく文武各官衙の應辨時宜を輯録し
 たもの、いわば官廳の細則要覽である。恐らく道光年間の官撰、
 盛京典制備考の底本となつたものだとしてゐる(目録二六、二
 一六頁)

⑭盛京典制備考八卷 光緒四年盛京將軍崇厚撰。これも滿蒙叢書三
 (解題なし)に收む。但し同叢書には輿圖一葉を缺く。木版本をみ
 ると、この輿圖は地名の記載は少く、清代の柳條邊牆とその關門
 の名を一々書いてあるのがやゝ有益であるに過ぎない。解題は東
 洋歴史大辭典、目録二一六頁參看。

⑮清查東大庫底檔 北京の内閣の東大庫の文書書籍を光緒二年に調
 査した時の藏品目録の稿本のことと思われる(讀史叢錄一四四頁
 參看)全體を禮樂射御書數の六庫に大分し、さらに千字文名の架
 によつて順序づけてある。史料的な文書・地圖の類は禮字庫より
 御字庫までに多く、書字庫には雍正硃批諭旨、各省賦役全書、千
 種以上の地志の名がみえる。本文の鈔本そのものを編者は著者の
 文庫中に見出し得たが、狩野氏(秋田縣の人)がどうしてこんなも
 のを持つていたかは詳かにしない。

⑯上遠野富之助 一八五九—一九二八 秋田縣人。はじめ新聞記者
 だつたが名古屋商業會議所書記長に聘せられた。のち同所會頭、
 車輛會社その他の重役となり名古屋の代表的實業家となつた(縣
 人雜誌一・二)

松田霞城 一八五五—一九三一 秋田縣人。南畫家、速成畫法の
 大家として全國に多くの弟子を持つていた。京都在住、編者の姉
 二人もその教えをうけたことがある。

田中 上遠野氏の後進として名古屋にいた秋田縣人田中小太郎の
 ことかと思われるが不詳(縣人雜誌一・二)

小山松壽 一八七六—? 長野縣人。號鼓浪。明治三五年朝日入
 社、ついで名古屋支局主任。三九年名古屋新聞を創りその經營を
 續けた。衆議院議長にもなつた(興信錄・村山傳)

中原 不詳。

殿村顯毅 秋田縣人。大阪で小學教員をし校長になつた。

⑰「名古屋の寶物」(明治三八・七・二九大朝、目録所收)の一文を
 指す。この文の初に前記小山氏に懇請された講演の交換條件に眞
 福寺等觀覽の幹旋方を申出で、歸阪を急ぐ身にも拘わらず一泊を

加えて見物した経緯が書いてあつて面白い。

- ⑮ 庄司乙吉 一八七三～？ 秋田縣人。號杜峰。のちに東洋紡專務取締役となる。著者とは終生親交あり。著に杜峰詩草等がある。

殿村顯發 註⑯

鹿田靜七 大阪の有名な唐本屋。

- ⑰ 磯野於菟介 號秋渚、漢詩・書を善くす。○木崎愛吉 號好尙。○小池信美。○辰井梅吉(註⑩)。○太田昇三郎。○中尾國太郎。○石橋爲之助(註⑨)。○五良子晴州。○根本房吉。○久松定憲。號澁江、編輯長。以上大朝社員。村山傳によつて知り得たもののみをあげた。

- ⑱ 眞田幸憲 一八七五～？ 秋田縣人。明治三八年四月廣島高師教諭、四四年奈良女高師教授となる(興信錄)

- ⑲ 新見吉治 一八七四～？ 愛知縣人。明治三三年東大史學科卒、三六年廣島高師教授、文博。現在横濱大倉山研究所々員。

重田定一 廣島高師教授(國史)

- ⑳ 石川連平 著者と同郷秋田縣十和田町毛馬内の人。當時吳要塞附砲兵。昭和四年中將、野戰重砲學校長となる(縣人雜誌二・七)

- ㉑ 青木定謙 秋田縣人。小學校教員より秋田縣學務部屬官となり、(著者の幼時)のち廣島縣内務部長まで昇官した(湖南、幼少時の回顧下し學海一・二)

- ㉒ 秋田遐邇新聞 明治六年東京の人松本讓が秋田で活版業の傍らこの新聞を創刊した。半紙版七八枚綴りの縣報を主としたものだったが十五年廢刊、秋田日報に引繼がれた(柳田清兵衛翁傳二二六)

- ㉓ 金島文四郎 一八六八～一九〇七 石川縣人。明治二六年日清貿易研究所卒業、三十年大阪商船へ入社、漢口勤務、三九年同社大

連出張所に轉任(回顧錄・先覺記傳)

- ㉔ 石塚英藏 一八六六～？ 福島縣人。東大法科卒、法制局に入る。日清役中韓國議政府顧問官となり、明治三八年關東州の初代民政長官。その後朝鮮總督府を経て大正五年東洋拓植會社總裁に就任、昭和四年台灣總督、六年樞密顧問官(續回顧錄)

- ㉕ 草場謨三郎 一八五九～一九三三 號金臺。鍋島藩の儒者草場佩川・船山を祖父・父とし、明治八年父とともに京都に移住、東京外語支那語科卒、陸軍に勤務。日清役後台灣總督府に轉任(著者は恐らく三十年頃渡台中にこの人と知合つたのであろう)日露役には陸軍通譯として従軍、三八年關東州民政署通譯。四四年以後朝鮮に官を得て大正十一年退職。支那語のほか時文・漢詩に秀でていた(回顧錄)

- ㉖ 川村景明 一八五〇～一九二六 舊鹿兒島藩士。文久三年英艦砲撃事件に十四歳で參戰以來日露役まで殆んどすべての戰爭に參加した。日露役中大將、鴨綠江軍司令官となる。さらに子爵、元帥を賜わる(先覺記傳)

- 川村景敏 一八七一～一九四一 景明の長男。子爵。明治二六年日清貿易研究所卒。日清戰後日本郵船に入る。のちに同社副參事、大連、長崎支店長(續回顧錄)

- ㉗ 長嶺子 鐵道の旅順支線中營城子・龍頭兩驛間にある廢驛。旅順の東北約十二哩。旅順攻圍戰の際兵站列車の終點として利用されたので有名だった(南滿洲鐵道案内「大正元年刊」)

- ㉘ 川上俊彦 一八六一～一九三五 新潟縣人。明治三五年著者はハルビンでこの人に會つてゐる。のち滿鐵理事・日魯漁業社長になつた(再游記・游清記十月十八日、游清記註⑤參看)

③小貫慶治 一八六八～？ 秋田縣人。著者の親友。明治三十一年より大正十年まで正金に勤め中國の各地の支店に歷任す。本文の時期は旅順支店開設のために旅順に赴任したばかりだった(續回顧錄) 明治三十二年著者の最初の渡清の時、任地天津より北京・長城見物に著者と同行している(己亥記略)

③篠田治策(策字本文作に作るは著者の誤記) 一八七二～？ 靜岡縣人。明治三十二年東大佛法卒、大里氏とは學友。四一年著者の間島行の際任地龍井村統監府間島出張所より道案内として舊蹟行脚に同道した。のち朝鮮李王職長となる(寫眞帖大里氏跋・興信錄)

③川久保鐵三 號鐵研。旅順川久保洋行店主。日露役には朝日の大連通信員になった。明治三十五年著者とともに奉天・ハルビン・北京まで旅行した(村山傳・游清記一、二)

③岡幸七郎 一八六八～一九二七 平戸の人。肥前の大儒楠本碩水に學び詩文をよくした。明治二九年上海に渡り、ついで漢口の漢字新聞「漢報」の主筆となった。因みに三三年この新聞は張之洞の彈壓のために經營困難となり、銀三千兩を以て張之洞に讓渡された。のち岡は東亞同文會漢口支部にあつて諸般の調査に盡瘁した。日露役には兵站物資の補給に盡力し、三八年滿洲軍總司令部附通譯官となった。四〇年また漢口に赴いて邦字漢口日報を創刊し、漢口在留前後三十年に及んだ(回顧錄・先覺記傳)

③伊地知幸介 一八五四～一九一七 鹿兒島の人。明治一二年陸士卒砲兵少尉、一三年佛國に一七年獨逸に學び二二年砲兵少佐。日露役には少將、乃木軍の參謀長としてまた旅順開城談判委員長として活躍、ついで要塞司令官となる。のち中將・男爵・第十一師

團長、大正二年豫備役。陸軍部内きつての俊才であつた(回顧錄・先覺記傳)

③有賀長雄 一八六〇～一九二一 大阪府の人。明治一五年東大哲學卒、有名な國際公法學者、「外交時報」の創刊者。晩年は袁世凱の法律顧問となった。日露役には旅順攻圍軍に従い、陣中「滿洲委任統治論」「保護國論」を著わして滿洲の處分について論じた(回顧錄・先覺記傳)

③東錫冠山・(東錫冠山)北砲台・二龍山・松樹山 旅順港より半徑五六軒東北方に扇狀に並んでいた一連の堡壘で、西北方の二〇三高地とともに日露役でもとくに有名な激戦地だった。日露役の日本人死者總數は陸軍約八萬二千、海軍約二千だが陸軍死者の約一七％の一萬四千餘人が旅順攻圍戦で死んだ。これら東・北諸砲台中東錫冠山は最も堅固で敵の自爆退却によつてやつと陷落、北砲台は敵の名將コンドラチェンコの戦死で有名、二龍山は最大の永久砲台で露軍の守兵五百餘人中陷落の際には生存者三名だったという。松樹山は四千の白礮隊などで有名(鮮滿支案内等)

③ポベーダ・ベレスヴェート 露海軍旅順艦隊所屬の一等戰艦、ともに一二六七四噸。明治三七年一月五日二〇三高地占領後この高地よりの砲撃によつて火災・浸水傾斜のため戦力を失つたまま旅順陷落に及んだ「日露交戦紀念錄」(明治三九刊)

③黃金山 旅順東港南方海岸の小山、海岸砲台あり。

二〇三高地 旅順周邊中最も高い山地なので露軍も之を死守した。日本軍はこれが占領に二個師團一旅團の兵力と八十日の日數を要し、露軍は五千餘、日本軍は七千餘の損害を出した。乃木將軍はこれを爾靈山と名づけた。

④⑥ 大内青麿 一八四五～一九一八 名は退、字は卷之、謫々居士または露堂と號す。仙台の人。佛教教法の興隆と済生利民を以て任とし、明治佛教界に特異な存在をなし、明治の唯摩居士と稱せられた。また講演に出版に教育に東西奔走し、その出版物には「あけぼの」「江湖新聞」「明教新誌」「釋門哲學雜誌」などがあつた（「護法」三二・二追悼號）

著者は明治二〇年上京後最初にこの人に師事し「明教新誌」等の編輯に従事した。また居士の歿後大正十年、ために大内先生碑銘を撰した。著者の大恩人の一人であつた。

④① 南關嶺 東清鐵道時代には旅順支線はこの驛で本線から分岐していたが、日露役後は分岐點を驛の南方一哩餘に移し信號所を設けた（南滿洲鐵道案内） 本文の時期には恐らく未だ舊のまゝであつたろうと思われる。

④② 相賀照郷 一八七三～？ 佐賀縣人。明治三三年東大英法卒。のち台灣嘉義廳長となる（興信錄）

④③ 三澤信一 一八六七～？ 久留米の人。明治二三年荒尾精に従つて日清貿易研究所に入る。日露役には陸軍通譯となり金州軍政署附。のち關東州の製塩、大同炭田の開発などに努めたがいずれもあまり成功しなかつた（續回顧錄）

④④ 岩間徳也 秋田縣人。關東洲金州公學堂南金學堂はこの頃開設され、岩間氏は創立當初より赴任し、のち學堂長となり在任二五年に及んだ（縣人雜誌二・九） 昭和四年勇退後も金州に永住、書畫甲骨骨を多く藏した。明治四五年には奉天に赴いて著者の寫眞撮影を少し手傳つたりした。

④⑤ 鶴岡永太郎 一八七三～？ 東京の人。明治三〇年東大法科入學

在學中上海に赴き三五年卒業。三七年陸軍通譯となり滿洲義軍の編成に盡力す。三八年金州民政支署長となり當時混亂を極めた治安恢復に努めた。のち奉天に定住し實業界に活躍した（續回顧錄） 本文に相賀氏を署長とあるが本文の方が正しいのであろう。

④⑥ 片谷傳藏 一八八〇～？ 青森縣人。明治三五年早稻田卒。北京の順天時報記者となる。三七年陸軍通譯となり從軍中東蒙古に七八回旅行して資源調査に従い、ついで拓殖事業をはじめ大正三四年頃には事業は隆盛を極めたが七年の争亂で挫折した（續回顧錄）

④⑦ 牛家屯驛 東清鐵道時代の營口終着驛。營口新市街の東北方約一里、遼河灣曲部にあり。日本接收後四年、明治四二年新市街の中央に新停車場營口驛を作り、牛家屯は貨物驛となつた（南滿洲鐵道案内・滿鐵十年史二〇七頁）

④⑧ 瀨川淺之進 一八六二～？ 岡山縣人。明治一六年外務省支那留學生として北京留學、二〇年領事館書記生、天津・釜山・桑港・漢口・元山に歷任ののち三五年牛莊領事となる。當時牛莊（即ち營口）領事館は全滿洲を管轄した。のち厦門・廣東を経て漢口總領事となつた（續回顧錄）

④⑨ 船津辰一郎 一八七三～？ 佐賀縣人。明治二一年十五歳で渡清以來五十年間中國各地の領事總領事を勤め、また實業界に活躍。明治三七年牛莊勤務。三九年初代南京領事代理となり、兩江總督端方と親交を結んだ（續回顧錄）。著者とは三二年上海で會つてゐる（己亥記略十月十一日、同註④⑨）

⑤⑩ 趙爾巽 一八四四～一九二七 字は次珊。同治一三年進士。光緒二八年（明治三五）湖南巡撫、三一年戶部尙書署理、三一年（明治三八）六月より三三年五月まで盛京將軍、同年湖廣總督、三四年

四川總督、宣統三年より民國元年にかけて再び東三省總督。革命後も東三省において依然名望高しとある（現代支那人名鑑大正元年外務省印刷・清史稿疆臣年表一二）

⑤1 河北車站 京奉線營口支線の終點。遼河の北岸にあり、對岸の營口市街とは渡船にて連絡する。

⑤2 與倉喜平 一八六五～一九一九 宮崎縣人。明治二十一年陸士卒、三十四年より福州・廣東・廈門・香港等にて華南の事情を調査、三十七年七月營口軍政官に任せられ三十九年十二月支那側に引繼ぐまで在任、陸軍内の支那通だった。のち士官學校長、中將にまでなった（回顧録・先覺記傳）

⑤3 井戸川辰三 一八六九～？ 宮崎縣人。陸士卒、明治三〇年から川上參謀次長の命により三十七年まで重慶に駐在し、その間四川・雲南・緬甸の奥地旅行を行い西南支那の事情調査に努めた。三十七年二月より青木宣純大佐の組織する特別任務班の第一班長としてゲリラ戰に活躍、三十八年八月新民屯軍政官となる。のち第十三師團長、中將を以て豫備役（大正一四）（續回顧録） 著者は三十九年にも奉天でこの人にあつた（日記）

⑤4 佐藤安之助 一八七一～？ 東京都の人。はじめ文學を志したが明治二六年陸士に入學、二九年より參謀本部で地誌編纂に従事、三四年天津の民政主任、三六年より青木宣純を輔けて北方經略の事に當つた。のち寺内陸相の命で現役のまま滿鐵に入社、少將を以て豫備役（續回顧録）

⑤5 牧卷次郎 號放浪。明治三十一年上海に赴き大朝特派員、三四年頃より六年間北京特派員。

土屋元作 號大夢。日露戰後大朝北京特派員。

⑤6 伊集院彥吉 一八六四～一九二四 鹿兒島縣人。明治三四年より三九年末まで天津領事・總領事、三十七年七月より三十八年一月まで牛莊領事兼任。のち駐支公使、大正一二年外相、男爵（回顧録・先覺記傳・故伊集院彥吉君追悼誌大正一四年）

⑤7 太田喜平 一八七五～？ 靜岡縣人。明治三十六年一〇月領事官補、三十八年六月牛莊在勤。四二年より大正五年まで牛莊領事、以後廣東總領事（興信錄・支那官紳錄）

⑤8 中島眞雄 明治三四年北京で順天時報を創刊した。編者が大いにお世話になつた回顧録・續回顧録の著者である。その序によれば大陸に奔走すること四十餘年とある。續回顧録を完成した昭和十六年八十三歳だった。氏のまとまつた傳記を編者が見出し得ないのは残念である。

⑤9 梨羽時起 一八五〇～？ 山口縣人。明治一三年海軍中尉。中將・男爵・貴族院議員（興信錄） 當時の役職は未詳。

⑥0 鄭永昌 一八五五～一九三一 長崎の通事の家に生る。父永寧、弟永邦とともに對支外交に盡した。明治三五年官を辭して袁世凱の囑託となり、大清河塩田を調査。日露役には滿洲軍囑託となつて遼東半島の塩業を調査、その後も中國の塩務關係の職にあつた（回顧録・先覺記傳） 著者は明治三二年九月天津でこの人に會つてゐる（己亥記略）

⑥1 平井半二郎 一八八一～一九〇六 京都市の人。號半骨。明治三五年渡支、北清新報の記者、三六年大朝通信員、また情報軍に通報した（先覺記傳） 營口にて客死す。

⑥2 池田龜治 一八六七～？ 秋田縣人。地方の銀行家、のち代議士（縣人雜誌一）

⑥⑤ 上遠野 栗? 一九二八 號判堂。秋田縣人。

⑥④ 吉原四郎 一八七一—一九〇八 長野縣人。明治三四年渡支、蒙古熱河方面で牒報任務に當る。三十七年二月より五月まで本文の海拉爾行に赴く(回顧録・先覺記傳)

⑥③ 青木宣純 一八五九—一九二四 宮崎縣人。明治一二年陸士卒、日露役では袁世凱との連絡係及び馬賊使用の特別任務の總指揮官として有名になった。中將、旅順要塞司令官を以て豫備役編入後袁世凱の軍事顧問となった(回顧録・先覺記傳・伊集院彦吉男、

青木宣純將軍追悼錄昭和九年)

⑥② 横川省三 一八七〇—一九〇四 盛岡市の人。沖積介とともに編者の年配の者なら周知の名である。明治三十七年二月二日スパイのかどでハルビンで銃殺された。

⑥① 深見十八 在奉天正金銀行員(本文八月二日參看) 明治三五年著者は營口でこの人に會つた(再游記九月二十六日)

(一九五七・五・一七)

昭和三十一年度京都大學文學部

東洋史關係講義題目(Ⅰ) * 印大學院共通科目

東洋史

講義 東洋史學序說
研究 * 均田制の研究

* 清代の通貨問題

* トルコ民族史の研究

* アラビア地誌の研究

講義 清末における近代企業發生史の研究

清代史料

宋史食貨志(方田 賦稅)

史記匈奴傳

演習 資治通鑑(唐紀)

講義 西南アジア史序說 前期
研究 * ヘブライ民族史
ソロアストラの以前と以後

後期

演習 * 楔形文字の解讀
中世ベルシヤ語
— 文法とアルダシル行傳の講義 —

語學 トルコ語

近代ベルシヤ語

ヒンディー語

梵語文法

アラビア語

ヒエログリフ

ヘブライ語

宮崎 教授

足利 教授

有賀 教授

伊藤 教授

中原 教授

伊藤 教授

羽田 教授

澤 教授

澤 教授

大地原 教授

藤本 教授

加藤 教授

ロイド 教授